旅行記

——現代世界の佛教に寄せる関心——

坂東性純

一

今年（一九七〇）の一月一杯、詳しくは去る一月五日から四週間、米国オハイオ Ohio 州にあるオーベリン大学 Oberlin College と、同じくクリーヴランド Cleveland 市内にあるケース・ウェスターン・リザーヴ大学 Case Western Reserve University で、佛教とキリスト教に関するセミナーが行われ、筆者はこれに参加する機会を得た。この四週間の中、第三週目のみは後者に参加し、その前後の三週間はオーベリン大学で過し、その後、米国東部、イギリス、北欧、ソ聯、インド、タイを経て三月廿一日に帰国した。このたびの旅行に関し、上記二大学のセミナーを中心として、現代世界の佛教に寄せる関心という観点から、雑然として未整理ながら、思いつくままに所感を記させて頂こうと思う。

周知の様にアメリカの諸大学は大体において二学期制を採用しているところが多く、毎年九月の半ば頃から十二月のクリスマス頃迄を第一学期とし、一月は初め頃か中頃に試験が行われ、二月から五月の下旬頃迄が第二学期に当てられている。但し三月半ば頃から末頃迄は春休みで、夏休みは六月初めに行われる卒業式の後、新学期の始まり頃迄あるようである。こういう学期制を俗に「四・一・四」と呼び習わしているが、最中の一、つまり大抵は試験に当てられる一月を、学生の自発的・能動的な諸活動にふり向ける試みが最近、学生運動の盛り上りと共に各大学で屢々なされるようになり、このため、試験というものを全く廃止してしまうことに踏み切った大学もある。この特別な一月の期間は Winter-term intercession とふつう呼ばれている。両大学における佛教（キリスト教）セミナー開催の試みは、実はこの期間の学生の創造的な学習の企画の一環として実施されたものであった。外部から、殊に外国から講師を招くことは学生の能力の埒外にあるので、こういう試みに積極的な理解があり、且つそれに必要な資金を獲得する外交手腕と能力とを兼ね備えた教授に恵まれた学生たちでなければ、到底この様な体験をもちえないことであろう。この企画はオーベリン大学では二つのグループに分け、一つを Meditation Workshop（参加人員三十名位）と称し、他方を Buddhism and Christianity Seminar（参加者十五名程）と呼んでいた。一方ケース・ウェスターン・リザーヴ大学では五十名程の単一グループが、Buddhist Meditation Workshop に参加するという形をとった。この種の試みは、後者においては初めてということであったが、前者では二回目に当り、昨年度は一月の同時期に、此度と同じようにタイ国の比丘 Chao Khun Sobhana Dhammasuddhi 師（ロンドンのタイ僧伽の寺院駐在）を迎え、又

大乗佛教からは花園大学講師・西村恵信氏が禅の立場からメディテーションの指導をされたという。筆者は此度は昨年西村氏の果されたお役目を浄土真宗の立場から果すよう要請されたが、当初から坐禅の指導は自分の任ではなく、浄土真宗の立場から、メディテーションを実習している学生の皆さんに、何かお役に立てば幸甚という気持で発言しましょうと自己の立場を表明しておいた。

教師の立場からこの企画を推進したのは、オーベリン大学においては、宗教学助教授の Donald K. Swearer 氏、ケース・ウェスターン・リザーヴ大学では同じく宗教学助教授の David Miller 氏であったが、スウェアラー氏は、昨年度の体験上、言わば両大学の総指揮官格で大いに活躍されていた。この企画にたいする全面的な没頭ぶりは、われわれ二人の講師の待遇に関する配慮から、公開講演会開催の企画、案内、学生の見学旅行（諸寺院・諸教会等）から個人的面接迄、目まぐるしい程の万般の活動ぶりから十分看取され、それこそ不眠不休の毎日を過ごされている様子は側目にも過重と感じられる程であった。しかし、この激務によく耐えて学生とエネルギッシュに応待されているさまは、教師としてあるべき姿の具現と敬服の他はなかった。

オーベリン大学滞在中、公開講演を二度するようにとの約束があったため、タイのヂャウ・クーン師は一月九日と二十一日に、それぞれ "Buddhist Meditation" と "Buddhism and the New Culture" と題し話され、筆者は一月十四日と二十八日に、それぞれ "Pure Land Buddhism" と "Buddhism and Modern Japan" と題して話した。場所は学生寮の一つで、中国文化・中国語専攻の学生のほか、極東問題に関心をもつ学生が多く住んでいる「アジア館」Asia House のシパード・ラウンジ Shipherd Lounge で毎回夕方七時半から、質問の時間も入れて十時近く迄行われた。大抵椅子は殆んど満員で、絨毯の上に坐ったり、後に立って聴いている学生もあり、佛教というテーマに関心を寄せる学生が、専攻の別を問わず、かなり多いことが注目された。服装は様々で勿論制服などはなく、男子学生は長髪・鬚面が多く目についた。背広にネクタイ姿は筆者位なもので、総体的に楽な身なりをしていた。女子学生は、ジーンズ（ジーパン）、超ミニ、マクシの何れかに亘っていた。質問の内容は、例えば大拙師の本などに書かれている禅僧のあり方が今日でも見られるかどうか、とか、禅の老師が身近にいない場合どうして坐禅をしたらよいかなど、現代の、しかも実際的なものが多く、次に涅槃・業・無我・さとりの内容と、キリスト教の教義との異同などがそれに次いだ。ひと頃世間に取上げられていた所謂「禅ブーム」という言葉が連想させる軽薄なものはかなり後退し、真面目に佛教に寄せている関心と期待の強さには、むしろ驚かされる程であった。

浄土教に関しては、禅程に知的関心の程は感じられぬながらも、殊に大拙師が屢々言及された「アミダの大慈悲」「妙好人」等を手がかりとして、アミダと神、浄土と涅槃・天国等の関連に関心を示した学生はかなりあった。殊に両大学で、ヂャウ・ク

ーン師の指導された南方佛教式冥想法の実践の時間を半分にして、筆者に日本式の念佛の発音の実際を聴かせ、且つ実修させてほしいという申し出があり、丁寧に称える音声から、略式に称える声迄を録音した上、できるだけ回数多く全員に称えさせてほしいと頼まれさえしたことは、筆者に色々考えさせるものがあった。念佛を恐らくインドのマントラと同列に見ているのではないかと考えたり、また本の中によく出てくる“Namu Amida Butsu”を実際日本人はどう発音しているかという実際的関心の現われではないか、と考えてみたりした。ともあれ、現在ペーパー・バックになってアメリカの青年の間にベスト・セラーの一つになっているフィリップ・カプロ Philip Kapleau 氏の「禅の三つの柱——教・行・証」Three Pillars of Zen—Teaching, Practice and Enlightenment が、禅は思弁でなく、一にも二にも坐禅することにつきる、と強調しているので、その実践的な佛教実修への強い薦めが、機械文明に行き詰まり、キリスト教への信を見失なった現代のアメリカ青年に受け容れられ、その余波が、念佛の探究に迄及んできているのではないか、とも思われる。また西へ西へと突き進んだフロンティア精神が西部が究めつくされるや、物質的には機械文明へと向い、又、精神的には禅を中心とする東洋の精神文化・宗教に向いつつあるのだと言えなくもない。このように恒に新らしきものへと勇猛果敢に突き進み、手当り次第探究して消化して行こうとする貪欲なまでの熱情は、もはや東洋的なるものへの甘い憧れの域をはるかに脱していることは明白である。この熾烈な情熱をある程度反映しているのは、オーベリンの街に限らず、現在アメリカの大きな書店の東洋の部の棚に、インド教・佛教・道教等の種々雑多な書物が所狭しと並べられていることであろう。『バガバド・ギーター』・ヨガ・禅・佛教一般・柔道・『易経』・LSD等さまざまの主題にわたり、殊に『易経』は最近、リヒアルト・ヴィルヘルム Richard Wilhelm からジョン・ブロフェルト John Blofeld の訳迄、数種の翻訳が一度に出揃っている程である。われわれは、この旺盛な、飽くことなきアメリカの青年達の東洋的なものへの智識欲、それに執拗な迄の熱烈な実践意欲を、「禅ブーム」の一語で片づけることは、とうに出来ない段階に達していることを痛感せしめられた。

オーベリン大学に到着した当初は、異常な低温を記録し、摂氏零下二十六度を記録した程であった。キャムパスは一面雪に覆われ、常時三十センチ程の積雪が見られたが、参加学生の熱意は、気候には些かも左右されることがなかった。初めの週のある日の午後、浄土真宗の勤行を、衣姿で如法に行ってほしいと要望され、持参の略衣を背広の上につけ、輪袈裟をかけて珠数をもち、図書館からアミダ像を借り、学生がにわか仕立ての香炉・ローソク立て、華等を総がりで用意してくれたお蔭で、どうやら責を果すことができた。参列の学生は極めて真面目で、教職員も何人か教会へ参詣する正装で来られていたのには敬服の他なかった。現在カトリック教会や、プロテスタントの諸教会で、儀式の改革が色々問題となっている折から、殊に注目を集めたものと思われる。

オーベリン大学においては、二つのグループの活動が並行して行われ、メディテーションは、アジア・ハウス地下の体育館で毎朝十時半から十二時迄行われた。五分間の休憩を挟んで三十分ずつ二回坐り、残りの時間はヂャウ・クーン師の坐禅の心得に関する指導と感話に当てられた。同師は低い木製の椅子を用いることを薦められ、一人の学生が毎日沢山造る役を当てがわれていた。禅宗の坐禅では目をすっかりつぶってしまわずに半開きが薦められているが、上座部式のメディテーションでは、初心者には両眼を閉ぢるようにと教えるようである。昼迄のメディテーションは、全期間中を通じて毎日根気よく続けられた。ヂャウ・クーン師が一週間、クリーヴランド市内にあるケース・ウェスターン・リザーヴ大学へ行かれて留守の間は、筆者が同師の代理をつとめることになったが、全員の希望で、それ以来坐る時間を半分にして、あとは三十数回念佛を称えることになった。実用主義一点張りに見えるアメリカの学生達が、たとえ真似ごとの域は出ないにせよ、一時間以上もの無為の坐禅実修に耐えられる事実は、一体何を物語っているのか。しかも全く既成概念のない彼等にとって当然とは言え、全く異質の発音で敢て喜んで称名念佛に唱和する姿勢の背後に動いているものは一体何であるのか。単なる物珍らしさから来る、興味本位の異国趣味が全くないとは言えぬが、さりとて、それだけのものと決めつけて了うことの出来ぬ志向の動いていることを感じたことであった。恐らく二百年そこそこの文化的伝統とは違った、何千年来東洋人の心情を培ってきた精神的遺産への畏敬と信頼の念も無くはないであろう。事実、個人的に対談したり、質疑応答のやりとりの間に感じた学生達の真摯な心情を想起すると、とどのつまりはこの事に尽きるやに思われる。学生の間には、現在ＬＳＤやハシーシュ（マリファナ）を用いている者がかなり多く、これらを一方において用いつつ、坐禅をしている学生などからは、真面目な精神的悩みを聞かされたことも屢々であった。

も一つのグループは、佛教・キリスト教のセミナーであったが、これにはスウェアラー助教授のほかオーベリン大学の宗教学科で教鞭をとっている Grover Zinn 助教授（教会史専攻）と、オーベリン地区のカトリック司祭である George Simons 神父も参加され、学生の討議に加わられた。このグループは、毎週三度程定期的に午後アジア・ハウスのシパード・ラウンジ（ラウンジは英国の大学で謂う Common Room）に集まり、討議の外に映画やスライドを見たり、時には週末などに、諸宗教の寺院・教会（例えばクリーヴランドにある本派の浄土真宗寺院・カトリック教会・尼僧院・オーソドックス教会など）に見学旅行に出かけたりなどした。書物の上での他に、佛教徒と称するものに、これ迄出逢ったことすらない学生たちが大部分なので、大抵は、神と佛、イエスと釈迦、佛とは、菩薩とは、さとりとは、という基本的な話題に集中し、それが現代の問題に及ぶこと屢々であった。

クリーヴランドのケース・ウェスターン・リザーヴ大学は、クリーヴランド市内にあり、エリー湖に程近く、湖上から吹き

つける寒風をまともに受けるのでかなり寒気は厳しく、摂氏零下七、八度が恒であった。ここでは坐禅の場所は、女子屋内体育館 Haydn Hall が使われ、毎日午後三時から四時半迄五十名内外の参加者を得て行われ、五分の休憩時間を挟んで、三十分ずつ二回坐ることになっていた。ところが、ヂャウ・クーン師の後を承けて赴いた筆者が到着するや、後半は専ら称名念佛に切り替えて、しかもなるべく数多くやってほしいという注文であった。ここでは一人の係りの学生が、坐禅と念佛の間、常にガネーシュ Ganesh の形をした香炉にインドの香を焚いていたのが印象的であった。又、始まりには合掌してパーリ語の三帰依文も唱和した。オーベリンでは参加者が学生のみで、しかも多数の申込者の中から選ばれた者のみであったに対し、ここでの特色は、学外からの参加をも認め、又他学部（宗教学以外）の教授や学外の人びとも参加していたことである。それに、学生参加者の大半が、ニューヨーク附近出身者の、しかもユダヤ教徒の家庭から来ているもので占められていたことである。周知のように、キリスト教とユダヤ教との関係は、佛教とバラモン教の関係に似て、前者が後者へのプロテストの所産であるという点に発生的な共通点をもっているが、現在においても尚、両者は互いに独自性 identity を主張して譲らない点迄もそっくりである。キリスト教国と称されるアメリカでも、ユダヤ教は無視出来ぬ宗教人口を擁し、現在でもキリスト教徒とユダヤ教徒との間に存在する感情には微妙なものがある。休日がキリスト教徒にとっては日曜、ユダヤ教徒にとっては土曜という風に、慣習一つにしても喰い違う面を充分にもっている。その上、ユダヤ教内部においても伝統的な人達と、革新的な人達との間にかなりの懸隔があり、殊にユダヤ教徒の家庭に育ちながら旧い型の伝統的な行き方に反撥を感じている若い世代は、キリスト教に走る訳にも行かず、自然に比較的「宗教」臭のない佛教に心を寄せるようになるものが多いようである。その上彼等は実際熱心に神なき佛教の宗教性を追求してやまない。ここでの指導者・ミラー助教授はハーバード出身で、鈴木大拙博士の講義を聴く縁に恵まれたことを誇りにしておられたが、この催しが終り次第、自動車で学生数名を連れて、ロチェスターにあるカプロ師のメディテーション・センターに行き、二・三日坐禅してくるつもりだと話していた。ここでは僅か一週間の滞在であるため、筆者をなるべく学生にパーソナルに接触せしめるため、昼食・夕食には希望者順に招待者が決められていて、毎日違った所で、違った顔ぶれの人達と親しく語り合うことができた。学生寮・下宿・アパート等さまざまで隣・近所の学生達迄押しかけて話しこんで行く時も屢々あり、談話の種は尽きることがなかった。最近では部屋を、マンダラを始め、佛像、佛画、香炉、ローソク立て、浮世絵の版画、日本や南方佛教国の写真で飾る東洋憧憬者が多く、おびただしい数の美術・骨董がアメリカ各地に東洋から流出・散在していることが想像される程であった。佛教寺院の読経を録音したレコードを持っている者もいた。殊に何人かの学生がカプロ師の本などに触れて、将来日本に行って禅寺で坐禅を実修してみたいという真面目な志願を懐

いており、その為日本語の勉強を開始しているとの事であった。そういう学生に対しては、余りバラ色の夢を描かぬ様にと警告しつつも、学生達をこれ程までに駆り立てているものは一体何なのかを思い巡らさざるを得なかった。

屢々念頭を去来した思いは、佛教の伝わってきた歴史的経過、及び佛教伝来当初の日本であった。佛教の伝わり方は、要するに「求められて伝わる」ということではなかろうか。アショーカ王が宣教師を各地に派遣したという先例はあるけれども、佛教はこれ迄決して、植民主義と手を結んで宣教師を海外に派遣し、地元の信仰を根こそぎにして、自分の持って行った信仰と入れ替えるという方法に訴えたことは一度もなかった。インドから中国に佛教が伝わったのも、中国の青年がインドに赴いて学び、自国に持ち帰って拡めたと言える。法顕・義浄・玄奘等はその代表であった。佛教が大陸から日本に伝えられた時も、その移植に最も大なる役割を果したのは、遣隋使・遣唐使一行に加わったり、あるいは単独で赴き、佛教を彼の地で体得し、日本へ紹介した青年僧達であった。今や佛教は、アメリカの青年達によって熱心に求められ、白人の間への布教に余り乗り気でない佛教諸宗の大部分の開教使達の怠慢を尻目に、日本本土に迄その求める手は及んできている、という感じである。佛教は本来自律的な求道的な教えであり、施設や制度が先行するのでなく、生ま生ましい、止むに止まれぬ求道者の側の菩提心が、常にその伝播の主動力としてあるようである。宣教の怠惰は、良い意味で解釈すれば、因縁の熟するのを永い眼で待ち、求める側の自律的な意志を飽く迄尊重するという態度の現われであると見られぬこともない。ただ佛教国を自任する日本に、時機円熟して渇望している国の人達の要請に応えるものがあるかないかが問題であると、切に思わしめられる。

飛鳥朝の頃、朝鮮半島から伝来した佛像・経巻・佛具に素朴な関心を寄せた人達は、それらの由って来るところが一体何であるのか一番知りたかったに違いない。殊に好奇心に溢れた青年達は、その由来がだんだん知られてくるにつれて、できれば機会を掴んで、朝鮮や、中国、更にはインドに迄赴いて自ら確かめたいと願ったことであろう。現在のアメリカは、佛教に関する限り、飛鳥朝の日本を髣髴せしめるものがある。マンダラや佛像を以て自分の部屋を飾るアメリカの青年男女を見て、これを表面上からのみ眺めて、徒らにロマンチックな異国趣味と一笑に附することは容易である。しかし、単にそれだけのものであろうか。秀れた芸術作品に限らず、素朴な美術品には、理窟を超えて人間の感性に直かに訴える何物かがあるようである。ここには言語の障碍もなければ、理論の齟齬などの問題もなく、それが美しければ文句なしに見る者を魅了するだけである。しかし、その由って来る背景を知りたくなるのは、人情の自然というものであろう。多数の東洋の美術・骨董品こそは、実は無言の宣教師であったと言えないであろうか。ひとたび佛像等の不思議な魅力の虜となった者は、外国から押しかけてきた宣教師の強制に依らずとも、自ら進んで、求めるのである。ここに、現在アメリカの若者の間で、密教への関心が、禅に劣らず高い

所以がある。エヴァンス・ヴェンツ Evans Wentz の諸著作（*Tibetan Book of the Dead*, *Tibetan Book of the Great Liberation*, *Tibet's Great Yogi Milarepa* など）やラマ・アナガリカ・ゴーヴィンダ Lama Anagarika Govinda の *Foundations of the Tibetan Mysticism* などが、ペーパー・バックで学生の間にかなり広く読まれているのは、その証左と見られよう。このように形から心への順序は人間性に内在する鉄則のように思われる。その意味で、米国佛教が先づ密教への関心、そして禅の実修への関心に向けられるのは自然であり、当然である。一方浄土教が真の意味で迎え入れられるには、かなりの歳月を要すると思われる。国民の大部分が現在以上の深刻な危機感に見舞われるような契機や、真に差し迫った末世的症状が深化するような時期を幾つか経過した後に、始めて浄土の機縁が円熟するものと思われる。それ迄は、浄土教の教義に対する関心の度合や、称名念佛の実修に対する求め方は、表面的、呪術性から脱脚できぬマントラ的なものに留まっていることであろう。恰度、禅の世界における鈴木大拙博士の紹介期を経過して、カプロ氏のような米国人による禅の唱道者がポツポツ出始めたのが現況であることを思えば、米国における浄土教は、米国人の一遍・法然・親鸞が輩出した後に、漸く本格的なものに移行するのではないかと予想される。

二

現在イギリスの最も著名な佛教学者は、エドワード・コンゼ Edward Conze 博士と言われているが、一九六一年の正月、オクスフォードに於て行われた佛教セミナーの時以来お会いする機会をもたなかったので、問合わせたところ、現在お住居はロンドン西方五十マイルにあるドーセットシャー Dorsetshire のシャーボーン Sherbourne にあるが、目下ドイツのボンに数ヶ月の予定で講義のため出張中との事であった。ロンドンのマーコ・パリス Marco Pallis 氏は筆者の訪英を知り、ロンドン滞在中二度招いて下さった。最初の訪門の際、ロンドン佛教会長・クリスマス・ハンフレーズ Christmas Humphreys 氏と、ケムブリヂ大学で日本語の教鞭をとっておられるカーメン・ブラッカー Carmen Blacker 博士がわざわざ訪ねて来て下さった。三人とも鈴木大拙全集の英文篇刊行のことがどうなっているかと訊ねられ、またイースターン・ブディスト The Eastern Buddhist の今後のことにも深い関心を示された。ロンドンを発つ直前、ケムブリヂ大学佛教会主催でハンフレーズ氏の講演があった。ハンフレーズ氏運転の車に乗せて頂き、夫人も同乗された。ロンドン北方のケムブリヂ迄一時間半のドライヴであったが、その間車中でハンフレーズ氏夫妻とゆっくり談話する好機を得たことは幸いであった。現在イギリス佛教界は宗派乱立時代とでも称すべき時期を経過しつつあるようである。英人による佛教会は、ハンフレーズ氏の主宰する London Buddhist Society のほかに、英人サンガラクシタ氏主宰の The Friends of the Western Buddhist Order、それに英人ジャック・オースチン Jack Austin 氏を中心とする The We-

stern Buddhist Order があり、その他タイ、セイロン、チベット系等七つか八つの佛教会がある。悲しむべきことには、殊に英人系の佛教会間の対立はかなり深刻であるようである。ケムブリヂのクェーカーの建物で夜の八時半頃から十時頃にかけて行われたハンフレーズ氏の講演会は仲々の盛会であった。イギリスの大学の種々の学生会は一般市民にも開放されているのが特色であるが、この夜もかなり一般の人達の聴講が目立った。これからの英国佛教について、ハンフレーズ氏が、英国佛教はどこの国の佛教の模倣であってもならず、英国独自の佛教を創造すべき旨強調すると、終りの質疑応答の時、特に若い学生から猛然たる反撥を受け、ハンフレーズ氏の所説は甘い理想論にすぎぬと主張してやまなかった。彼等は、英国は未だ佛教に関する限り歴史が浅いのであるから、上座部佛教であれ、禅であれ、何千年来の歴史の批判に耐えてきた何れかの宗派に信を寄せ、それに専心打ち込んで行くことが最も必要なことで、英国佛教は軽薄な理想論によって「作る」ものでなく、懸命な修行にはげんでいる各人の行いによって自ら「作られる」ものである、と言うのである。筆者は、この六十九歳になられる英国佛教会創始者に対して敢然と所信を主張し、一歩も譲らぬ現代のケムブリヂ大学の学生達の姿に頼母しさを感じた。因みに、現在オクスフォードよりもケムブリヂの方が佛教会は繁栄しているという。これはカーメン・ブラッカー博士らの熱意にもよることであろう。この夜の講演会において一昔前の状況と思い合せ、英国佛教会も新しい世代に何時の間にか中心が移っていることを痛感せざるを得なかった。尚ロンドン滞在中、ロンドン大学のアジア・アフリカ研究所で佛教を講じておられる稲垣久雄氏のお住居を二度訪れ、現況に関し色々伺うことができた。日本佛教の教義に関するこれはという適当な英文テキストが見当らず、創造して行かねばならぬ御苦労の程を語られた。又、浄土教を西欧に紹介する際、『大経』『小経』よりはむしろ『観経』を重視すべきであるという注目すべき見解を伺った。

ストックホルムで、元大谷大学の聴講生ビョルン・ヴェスター Björn Wester 氏及びその師匠であるアミタ・ニサッタ Amita Nisatta 尼に再会した時、スウェーデンでも最近佛教に対する関心が高まりつつあり、同尼は週一度ずつ、ウプサラ大学とストックホルムの民俗学博物館でメディテーションの指導をされておられる由。後者はストックホルム大学の学生が中心であるとのことであった。フィンランドの首都ヘルシンキで、そこの佛教会長 Leo Hildén 博士から氏の主宰する The Friends of Buddhism の現況を伺い、ここでは坐禅よりは佛教に関する知的会話、佛教と精神分析等の諸科学との関連などに関心が深い由。フィンランドの西方にある古都トゥルクウ Turku にあるトゥルクウ大学は、フィンランド語かスウェーデン語の何れかの講義される言語によってキャムパスが分れているが、前者の宗教学科主任のホンコー Lauri Honko 博士のお話では、最近佛教に対する関心が高まりつつあるが、適当な講師や参考書がないまま、比較宗教学の一部として取扱われているに過ぎぬとの事。後者の宗教学部主任のビーツァイス Biezais 博士に

よれば、佛教は一般教養中の基礎学科の一章をなすのみである由。但し博士ご自身は佛教に対する造詣の深いことが会談からも知られ、研究室のカードの鈴木大拙の名前の多いことを特に示され、最近学生の間で禅に対する関心が高まりつつあると言われた。総じてスカンヂナヴィアの宗教研究は、佛教に限らず、民俗学的視野からの研究が全盛であるとの印象を得たことである。

レニングラードのエルミタージュ Hermitage 美術館では、紹介されたブラック Virko Borisovna Black 博士に刺を通じたところ風邪で休まれているため、出て来られたグリゴレヴィッチ Lukonin Vladimir Grigorevich 博士の紹介で、東洋部敦煌文書主任のプチェリーナ M. L. Rudova Pchelina 博士が出て来られ、同博士の案内で、折から整理中で一般公開されていない東洋部の案内を受けることが出来た。昨年日本で行われたシルク・ロード展から返品された荷の一部は、未だほどかれずに置いてあった。コズロフ Kozlov が今世紀初頭、中央アジアの Khara-hoto で発掘した品々の中に、阿弥陀三尊の来迎図があり、その三つが壁に掛っていたが、その中の一つは日本で見たもの、他の二つは初めてであった。プチェリーナ博士はエルミタージュの出品の責任者として来日されたが、後者の二つの中の一つの写真を一葉下さった。十二世紀に描かれたと推定されているので、日本の源信に遅れること百年余りの時、これが描かれたことになる。アミダ来迎図の発祥を、すべて源信に帰してしまうことが無理であることをこれらは実証している。頂戴した方の来迎図の方が、日本へ来たものよりは、中国の影響が顕著でかつ秀れているようである。

モスクワの東洋学研究所へは、ソ聯の科学アカデミー Academy of Science の美術研究所 Institute of Fine Arts 勤務のヴィノグラドヴァ Vinogradova Nadejda Anatolievna 博士、ムリアン Inna Murian Pheodorovna 博士、イォファン Natalia Ioffan 博士の三女史に案内されて訪れた。すぐにリョーリヒ記念図書室 The Memorial Cabinet-Library of Prof. G. N. Roerich に通され、ここで三十五歳の中堅佛教学者ボンガード・レヴィン G. M. Bongard-Levin 博士にお目にかかった。セイロンで東大の森祖道氏と佛教遺跡の協同踏査をされたことがあり、又、東大の中村元博士と文通されているという。ボンガード・レヴィン博士は、現在レニングラードのソ聯科学アカデミー・アジア研究所に所蔵されているオルデンブルグ S. F. Oldenburg 将来の写本中の『涅槃経』の写本の研究をしておられるという。東トゥルキスタン Turkestan から出た写本の断簡中には、『法華経』が五〇〇葉、『涅槃経』が六葉、ダラニ類が十一葉あるとの事。リョーリヒ記念図書室では、主任のゲオルゲ Tsyghankov George 博士、セイロン佛教史専攻のセメカ E. S. Semeka 女史、ディリコフ博士の令嬢ヴィレナ Vilena Sandjeyevna Dalykova さんに紹介された。ここの研究員であり、モスクワ大学で現代インド史を講じているワファ A. H. Wafa 博士は、生憎く席を外しておられた。ヴィレーナさんはモスクワ大学の東洋学部で中国学を専攻し、最近

ここに勤めるようになってから、父上の専門に刺戟されて佛教に関心をもち、チベット語の学修を始め、現在、リョーリヒ博士が始められた『蔵露英梵対照辞典』（七・八巻の予定）の事業に参加、目下それに従事しており、現在第二巻目を準備中との事。彼女の父上の五十七歳になるダリコフ Sandje Dantsikovich Dylykov 博士は、折から二週間の予定でカトマンズに出張中で留守であったが、三月下旬十日間香港で行われる佛教セミナーに出席の後一旦帰国する予定との事であった。ネパール訪問は、恐らく今年の六月十一日から十三日迄、外モンゴリアのウラン・バートル Ulaan Baatar で開かれる佛教徒会議の下相談のためであろうとの事。これ迄ソ聯における佛教研究の拠点は、レニングラードかモスクワに限られていたが、ソ聯領内で佛教徒人口の最も多いシベリア地区に近いブリアト Buryat共和国の首都ウラン・ウデ Ulan Ude にも研究所が創設され、佛教研究を開始したという。ディリコフ博士はもとラマ僧について学んだ蒙古学者であったが、最近における関心は専ら各国の現代佛教に向けられているとのこと。ディリコフ博士の経歴は第二次大戦前はレニングラードの東洋研究所で中国史関係の助手を勤め、大戦中は陸軍士官となり、最近このモスクワの東洋学研究所 Institute of Oriental Studies 勤務に転じたらしい。セメカ女史は非常に多忙の様子でゆっくり話すことができず心残りであった。ついでながら、日本でよく問題になるスチェルバツキーかスチェルバトスコイかの発音の問題についてヴィレーナ嬢に問うたところ、両方用いられており、どちらでも可ということであった。他に現代ソ聯で佛教に関連のある研究をしている学者の名をボンガード・レヴィン博士に尋ねたところ、博士は次の三名を示された。即ち、スチェルバトスコイの直弟子の一人であるセミチョフ Bris Vladimirvich Semychov 博士、ブリアート人のダンダロン Bidya Dandalonovich Dandalon 博士、それに同じくブリアート人でチベット美術専攻のゲラシモヴァ Gerasimova Ksenia Maximovna 博士であるとのこと。現代ソ聯の佛教研究の概況は、東部領内のラマ教徒の存在や、多教の発掘資料の存在それに世界を風靡する佛教への関心などから無視できぬ研究の分野として取上げられつつあり、その性格は多分に、考古学的・文献学的な色彩が濃厚であることが注目される。